

『皆の僕になりなさい』

聖書 マタイによる福音書第20章20～28節 讃美歌 505 504

説教 森田幸男牧師

先週は第一水曜日で月例の中之島公園での炊き出しのために正午礼拝はお休みでした。先々週と一緒に読みましたのは今日の箇所です。ここに記されております。イエス様が“三度死と復活を予告された”ところであります。

今日の箇所はそれに続くところであります。ここを読んでおられますと、イエス様の弟子たち、それは十二人の弟子たちに限りませんけれども、その他にも今日ここに出てまいります。ゼベダイの息子たちヤコブとヨハネの母親が、その息子たちと一緒に出てきます。この二人の息子はガリラヤで漁師でありましたけれども、イエス様に従いました。彼らだけではなくてこの母親もイエス様のあとに従ったのであります。イエス様が十字架につけられた時にはそこに居合わせた人々の中にこのヤコブとヨハネの母親もいるのです。そういうことでありまして、イエス様がご自分の死と復活を三度もお語りになりましたけれども、それを弟子たちがどのように聞いたかということが、今日の箇所を見ると分かるのであります。

今日の箇所には、“ヤコブとヨハネの母の願い”という見出しがついています。その下に、(マルコ 10:35～45)と並行記事の箇所が出ておられて、そこには「ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出てイエスに言った。『先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが』」となっております。母親は出てこないのです。いずれにしても弟子たちも、また息子たちを通してこの母親も、イエス様が死と復活を予告されたことを聞きまして、弟子たちは、そしてこの母親も、イエス様が王座に、ユダヤの指導者にお就きになる時が近いことを感じたのではないのでしょうか。そこでこの二人と母親はイエス様のところに赴いてお願いをするのであります。「王座にお就きになるとき、二人の息子の一人はあなたの右に、もう一人を左に座れるとおっしゃってください」と願い出たのです。このヤコブとヨハネはガリラヤ湖で漁師をしておりましたが、それはただ普通の漁師というよりもペトロにしてもこのヤコブ、ヨハネにしても、雇い人を持った「漁師の親方」というイメージを抱いた方がいいと思いますが、(マルコ 1:20参照)そのペトロ、ヤコブ、ヨハネがイエス様の弟子になった最初の人たちであります。ですからイエス様はしばしば山に登られる時にもペトロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけを連れて行かれました。そして受難の前夜ゲッセマネの園でお祈りになる時もこの三人を連れて奥へ行かれた。そのようにこの三人が十二人の弟子の代表的な立場にあったことが窺えるわけであります。そしていよいよイエス様が王座

に就かれる。つまり、人々の支持を受けてユダヤの指導者になられる。その時が迫っていることを強く意識して、このヤコブ、ヨハネの母親はペトロを出し抜き、他の弟子たちを差し置いて、「私の二人の息子をあなたの右と左に、その地位に就けるようにおっしゃってください。約束してください」と、こういうことを言っているわけです。

20 節を見ますと、「そのとき、ゼバダイの息子たちの母が、その二人の息子と一緒にイエスのところに来て、ひれ伏し、何かを願おうとした。」それはその態度で分かるわけですが、「ひれ伏して」というのですから、何か特別の用件があるというのが窺われますが、イエス様が、「何か望みか」と聞かれたら、このように言い出したのですから、そこには何らかの後ろめたさがあるわけです。或いはペトロを出し抜いて、他の弟子たちを差し置いてという気持ちがこういうところに窺えるかもしれません。

こういうところを見ておきますと、人はどんな話であっても、そしてそれは聖書という書物であっても、人は自分の都合のよいように聞き、読むのではないか。イエス様が「死と復活」ということを繰り返しおっしゃっていますが、それはそれで一応聞くわけです。聞いたからこそ、今この機会にお願いして、イエス様の口約束を取り付けておかないといけないと、こういうふうには迫られるものがあったのでしょうか。

どう聞いたか。「死と復活」ということを聞いたわけですが、それをこの母親も二人の息子たちも「たとえ」のように聞いたのではないのでしょうか。「死と復活」であります。「今から尚、死ぬほどの思いをするような困難があるにしても、私は必ず復活する。死ぬほどの困難があっても私は必ずそれを克服して成功する。」そういうふうには聞いたのではないのでしょうか。そうでなければ、こんな願いをするはずはないと思います。

この母親と二人の息子に見られる、やはり人を出し抜いてでも成功して地位を獲得するというこのような思いは、ある意味では人間共通の願望と言っていいのではないのでしょうか。人それぞれある意味で人より上に出て、それなりの地位に就く。後の方でイエス様がおっしゃっていますが、「異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている」と。そういう者になりたい。息子たちにはなってほしい。そういう思いがここに表れていると思います。そしてそれはこの三人だけでなく、24 節を見ますと「ほかの十人の者はこれを聞いて、この二人の兄弟のことで腹を立てた」と、他の弟子たちの反応が記されております。これがペトロも含めてほかの弟子たちも、「何を馬鹿なことを言っているのだ」と笑えなかったわけです。「そんなことではないだろう、イエス様がおっしゃっているのは」というふうには、彼らもとらなかったのです。というのは「仲間を出し抜くとは何だ、汚いではないか」という思いに駆られたということではないのでしょうか。ですから十二人の弟子と母親一人のたった十三人ですが、それは、我らすべての中にある共通の願望だと言えるのではないのでしょうか。

そこで 22 節、「イエスはお答えになった。『あなたがたは自分が何を願っているか、分かっていない。』」つまり、この母親は「イエス様の死と復活の道にわたしの息子た

ちもついていくし、わたしもそれを全面的に応援しますから、息子達を右と左に就けてください」と言っているのです。そしてイエス様も、「たしかに、あなたがたはわたしの杯、（これは旧約聖書を読むと、いろんな「苦しみ」「試練」を指すのですが）を飲むことになる。しかし、わたしの右と左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それはわたしの父によって定められた人々に許されるのだ」と言われて、イエス様のおっしゃることは誤解の余地はないのですが、これを聞いた弟子たちは、この二人に何かその願いを聞き届けられたのだというふうに、その部分だけを聞いて腹を立てているのではないのでしょうか。だから人というのは、全体が10であればそのうちの自分に都合がいいところだけ聞いて、喜んだり、腹を立てたりというふうなことを、私たちはいろんな局面でしているのではないかということをおぼせられるのであります。

25節、「そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。」これは前回の20章17節にも、「イエスはエルサレムへ上って行く途中、十二人の弟子だけを呼び寄せて言われた」とあり、これは特別な思いで大事なことをもう一度言われるということでもあります。前回、この「三度の死と復活」を読んだ時に、ここで言うておられることのイエス様ご自身による注釈がこの25節以下でなされているということをお告的に申しました。「そこでイエス様は一同を呼び寄せて言われた。異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。(これはこの世の事実であります。)しかし、あなたがたの間では、断じてそうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたいたいは、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。」このように言われます。こういうイエス様のお言葉を聞いたなら、「偉くなりたければ...、一番上になりたいければ...」というふうに、そこに焦点を合わせて聞けば、イエス様もそういうものの考え方をしているのではないかということになりますが、これは「たとえ」として読まないといけません。或いは、本当の偉さとか、上に立つ人というのはどういう人なのか、ということをお告げしていると聞かないといけないと思うのです。「あなたがたの中で偉くなりたいたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい。いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい」と言われます。この「仕える者」というのは、私たちが「執事」という言葉で訳している「ディアコノス」という言葉ですが、これは「召使」「従者」「給仕」等の意味の言葉です。そういうところから「奉仕」「世話」「仕事」という意味が出てくるわけですが、要するに「仕える者」であります。そして「僕」は「奴隷」という言葉です。いずれも徹底して己を無にして仕える道であります。

そしてイエス様は更に28節で言われます。「人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人を身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように。」前回も、「三度の死と復活」の予告の時に「人の子」「人の子」と繰り返して言っておられました。これはイエス様ご自身のことであると同時に、人の子である我々す

すべての者の道が「十字架と復活」にあるのだということを申しました。ここでもイエス様は「人の子が（先ずご自身のことでしょう。）仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように、あなたがたも皆に仕える者になり、皆の僕になりなさい」と、このようにおっしゃっているのです。

このように、召使、僕、奴隷であります。そして最後に止めのように、「多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのだ」と言われます。「身代金」というのは人が誘拐された時、それをお金でする場合もあるし、その代りに自分がその人の身代わりになって捕らわれの人を解放するための代金です。そういう者として自分の命を献げるためにわたしは来たのだと。ここにイエス様のなさっておられることの意味があるわけです。いろんな意味で捕らわれている人がいる。その人が解き放たれて本当に自由になるためにこそ、自分は自分の命を捧げるのだ。注ぎ出すのだ。これが「人の子イエス様」の道であり、我々が更に真剣に必死に求めていかなければいけない道なのだと言っておられるのであります。

ここで最後に一言お勧めを申して終わりにしたいと思いますが。私たちもそれぞれ家族、友人、知人等があります。そして私たちもそれなりの捕らわれがありますが、本当に深刻な、更に深刻な捕らわれの中にある人がありますけれども、私たちの関心とかそういう事柄に対する気持ちの持ち方というのは、通り一遍で終わっていないか。そういうことを私はここを読んでいて、自ら問われる思いがいたしました。「多くの人」というのは、「すべての人」という意味を聖書では持つわけですが、結局は私たちが具体的に出会い、関わる場所の一人一人に対してということになると思うのです。そして私たちはそのような人を必ず持っているのです。そこで、その人が本当に自由の身になるために私たちが粉骨砕身して仕える道、仕事（仕える事と書くのですが）があるのではないのでしょうか。また逆に言うと、それぞれこの世の務めがありますが、その仕事の中に、本当に仕える者として、僕として、また自らを身代金として献げるというこの表現で言われている精神を込める。その道へと、私たちはもう一歩も二歩も踏み込んで行かなければならない。そういうことを私はここを読んでいて、自らのこととして思い知らされた次第であります。

お祈りいたします。

神様。あなたは私たちを本当にすべての捕らわれから解き放つために、私たちをゆるぎない幸い、祝福に入れるために、いかなる犠牲をも惜しまれず、そのご意思ご計画を徹底して遂行してくださいました。また今もしていただきます。そのことを覚え感謝いたします。私たちもどうかあなたを見上げつつ、主に従いつつ、その道を進む者としてください。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前におささげ致します。アーメン